

人類の課題に新たな
〈知〉をもって挑む

Graduate School of **CoreEthics** and Frontier Sciences

「核心としての倫理」(Core Ethics) を軸に、**公共、生命、共生、表象**の四つのテーマのもと、新しい研究領域を創出します。

立命館大学大学院 先端総合学術研究科

<http://www.r-gscefs.jp/>

先端総合学術研究科の理念

日本の大学制度は今、近代化の初期に大学が創設されて以来、もっとも大きな変革の時代に直面している。学部から大学院までの教育研究システム全体が、国際的な水準を視野に入れた根底的な見直しをせまられている。高度な専門職技能の養成と、新たな時代の問題に取り組む研究者の養成がもためられているのである。この新たな時代の研究者の養成に向けて立命館大学が提起するのが先端総合学術研究科の構想である。

基本的に学部の上に置かれた現在の大学院は、明治以来の近代的学問体系にのっとったディシプリン、すなわち専門分野の区分に基づいて構成されている。先端総合学術研究科は、20世紀から今世紀に引き継がれた新たな質の、先端的なテーマに取り組む研究者の養成のために、特定学部を基礎とするのではない独立研究科とした。独立研究科としてディシプリンの総合化をはかり、また、研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究における教育によって、大学院教育と先端的で総合的な研究との緊密な結合を実現することを基本的な狙いとしている。(2003年先端総合学術研究科開設文書より)

一貫制のプロジェクト型大学院

——ディシプリンからテーマへの転換

1 特色

多様なプロジェクトが織りなす新しい大学院教育

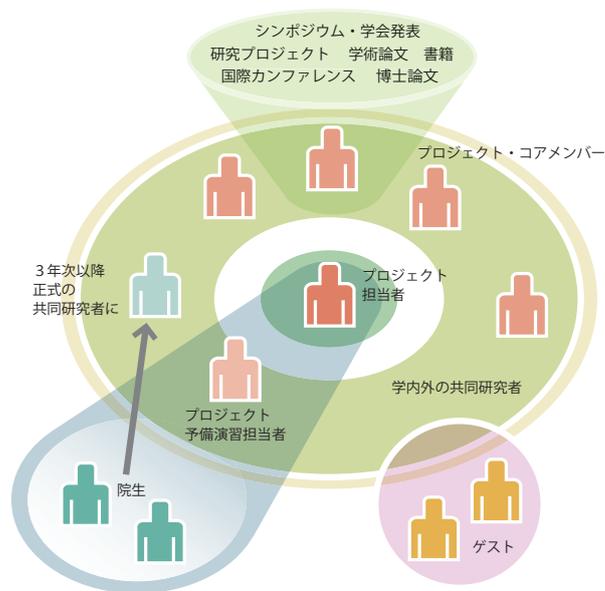
立命館大学の研究所・センター群は、学生が教員とともに課題とテーマを設定し学術研究を発展させるプロジェクト研究によって多くの成果を上げてきました。先端総合学術研究科は大学院教育とプロジェクト研究を結びつけることで、ディシプリンを横断し現代社会の要請に応じられる研究者の養成を行います。

カリキュラムは、①アカデミック・リーディングを学ぶ「基礎共通科目」、②4つのテーマ領域の専門知識を学ぶ「基礎専門科目」、③研究のアウトプット方法や倫理を学ぶ「サポート科目」、④テーマ領域ごとの研究の実践的な発表・討議の場となる「演習科目」に分かれています。プロジェクト型の教育・研究システムでは、各教員の「個別プロジェクト」が全科目の運営に反映され、専門分野のディシプリンにそって個別具体的に学ぶのではなく、テーマを横断した知を得られることが特徴です。

それ以外に、合同研究会やフィールド調査など、教員や院生の自主的・個別的なプロジェクト形成を通じて、新たな研究の潮流を生み出すことを目標とします。また研究会は専任教員を中心に学内外の第一線の研究者たち、さらにそのときどきのゲスト参加者を交えて開催され、研究ネットワークを形成します。

院生は、1、2年次には研究の基礎的な力を身につける勉強をしながら、こうした研究会やプロジェクトに参加します。1、2年次に履修する「プロジェクト予備演習Ⅰ・Ⅱ」は、各テーマ領域やプロジェクトに密接に関連した専門知識を有する教員のもとで、基礎的な研究手法を身につける科目です。2年次秋学期以降にはプロジェクト担当者である専任教員が受け持つ「プロジェクト予備演習Ⅲ」も加わり、博士予備論文に取り組みます。

博士予備論文の審査に合格すると、その院生は正式な共同研究者として、プロジェクト研究そのものの運営にあたって中核的な役割を果たすことになります。すなわち、計画的に研究を推進する日々の活動の一翼を担いつつ、研究会や学外の諸学会等における成果発表を着実に積み重ねていくことになるのです。



一貫制博士課程

3年次転入学

前期課程相当

1回生 2回生

- ・博士予備論文合格
- ・30単位取得 (修士学位取得可能)*

後期課程相当

3回生 4回生 5回生～

- ・構想発表会合格
- ・プロジェクト演習8単位
- ・論文 (査読付学術雑誌) 3編以上執筆

博士論文提出 → 審査 → 博士号

*2年以上在学し、所定の単位を修得し退学する場合に修士学位を授与することがあります。

2 教員紹介

4つのテーマ領域で専任スタッフがディシプリンを超えて新しい研究領域を創出します

個人個人の日常的な生き方から、国家や共同体レベルの政策決定まで、さまざまな次元を視野に入れながら、わたしたちは、コア・エシックス（核心としての倫理）にふれる4つのテーマを選びました。そして、テーマごとに「科目としてのプロジェクト」が設置され、さらに各教員が中心になって運営する「個別プロジェクト」が設けられるのです。

公共

21世紀における公共性

身体をめぐる言説・運動・政策の変容過程を検討しつつ、断片的な生のあり方を拾いあげながら、デモクラシーと生存のための社会システムの公共性を探ります。

生活史——岸政彦

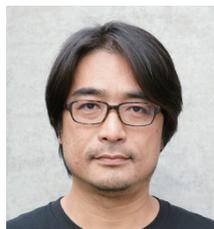
寛容さがますます失われつつある今、「他者理解」は何よりも私たちににとって必要なことだが、一方で他者を安易に理解することは暴力ともなりうる。私は、さまざまなマイノリティの個人的な生活史（ライフヒストリー）に耳を傾けることを通じて、ささやかながら、他者を理解することの可能性と不可能性について考えている。私たちはみな、どうしようもない現実のなかで、少しでもよりよい人生を生きようと懸命に努力している。そうした人生の物語が語られる現場に立ち会い、記憶と経験と歴史的現実が生まれる瞬間を目撃するために、今日もICレコーダーの小さな舟に乗って、生活史の海に漕ぎ出す。そこにはすべての苦しみ、悲しみ、喜び、希望と絶望がある。

医療・歴史・アーカイブズ——後藤基行

現代社会において医療は、人間にとって不可避なシステムである。しかしながら医療は、純粋な医療の要請からのみならず、人々の生活上の要求、政治やあるいは社会的恐怖からも制度化されることがある。医療と福祉や救済、社会防衛との接近である。医療の「公共性」を考えるためには、医療の先端的なイメージにとらわれるのではなく、医療のもつ歴史性を理解する必要がある。私は、歴史を深く知るためではなく、現代の問題の本質を把握するために歴史を知りたい。そのために医療者や行政、患者が作成した資料が必要だが、日本の医療アーカイブズは貧弱である。資料を残しながら研究する方法論を制度化していきたい。

身体の現代・他——立岩真也

私は私の仕事を続けていけばいくことになりませんが、以下はその一部でもあり、ただ自身でとてできず、多くの人がいるとよいと思うこと。2017年度ようやく通った研究費応募書類の冒頭。「障害や病が訪れて人は身体の差異・変容を生きる。その人達を巡ってこの国でこの50年余りにあったことの大部分は、記録も考察もされていない。今後しばらくが最後の機会となる。気鋭の研究者の力と大学院生・修了者の参与を得て、研究を組織化し、以下を明らかにする。」続きはHP検索→「生存学」→「身体の現代——言説・運動・政策」。



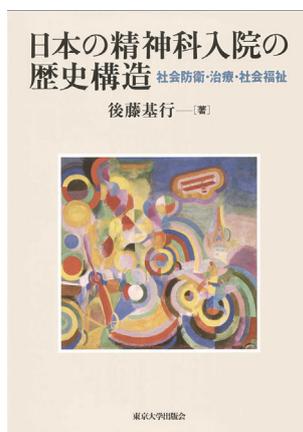
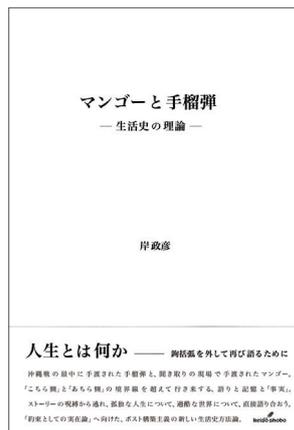
岸政彦
社会学・生活史



立岩真也
社会学・障害学



後藤基行
医療社会学・精神医療史





小泉義之
哲学・倫理学



松原洋子
科学史・科学技術論



美馬達哉
医療社会学

生命

争点としての生命

生命科学・医療・福祉をめぐる科学的知識・技術の歴史的検討、倫理的諸問題の整理を通じて、生命・生殖・病・死を総合的に探求し、新しい生命の理解と倫理の構築可能性をひらきます。

生命論の理論的争点——小泉義之

哲学・倫理学を基礎に、小泉が中心となって、近現代において生命と生物が理論的にどのように認識され、文化的にどのように表象されてきたのかを整理して、新しい生命論を展望する。また、現代生物学がいかなる理論的課題に直面し、現代文化がいかに生と死を表象しているかを整理し、生命と生殖と病と死について総合的に探求する。そして、現代的な生物観ひいては人間観を構築することを目標とする。

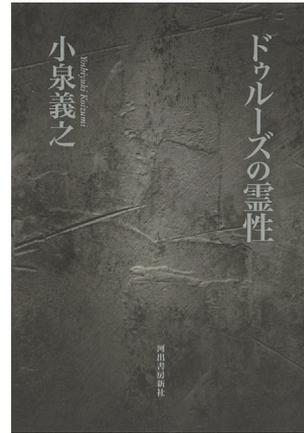
生命と技術の倫理——松原洋子

科学史・科学技術論を基礎に、松原が中心となって、生命科学・医療・福祉に関する科学的知識および科学技術をめぐる諸問題について広範な資料収集をおこない、適切な研究法を探求する。個体レベルでの生命の保持や能力の増進、次世代に関わる生殖や出生の管理、個体間での生体組織・機能や情報の交換、個と全体の関係が問われる人口・生態系・進化など、様々な位相に注目しながら、科学と技術の抱える問題を、整理・検討する。そして、こうした問題に接近するための生命論と、あるべき新しい倫理の構築をこころみる。

医療・身体性・グローバリゼーション・思想——美馬達哉

人間の身体は、私的な領域に属しているだけでなく、現代社会においては、バイオテクノロジーによって人格と切り離された独自存在—臓器やiPS細胞など—として公的領域のなかに組み込まれつつある。こうした意味で、身体と公共という論点は現代社会において重要である。今後の研究計画としては以下を考えている。

1. フーコーの権力論を批判的に継承しつつ、リスクに着目して、現代のグローバリゼーション状況のもとで身体性がどう変容しつつあるかを分析していく。
2. 医師という経歴を生かして、理系と文系の両方の分野を横断的に取り扱って、公共性を再考していく。
3. 脳可塑性の臨床応用とその社会的含意について、オシロロジーの観点から検討していく。





小川さやか
文化人類学・アフリカ地域研究



P・デュムシエル
政治哲学



西成彦
比較文学



山本貴光
学術史・コンピュータサイエンス

共生

共生の可能性と限界

多大な犠牲をとまう不完全な共生実験であった人間の歴史を批判的に遡りつつ、未来に向けて、そうした犠牲を伴わない生命と生活の可能性を構築する方途を探ります。

狡知、Living For Today、新しい経済文化の人類学的探求——小川さやか

文化人類学を基礎に小川が中心となって、世界各地の同時代を生きる人々の日常的でミクロな営みから、他者と共によりよく生きるための仕組みや知恵、新しい人間観・世界観を探求する。とりわけ、アジア・アフリカ諸国のインフォーマル経済とそこで働く知恵（狡知）、多様な「その日暮らし」のあり方と、ブロックチェーンやシェアリング経済をめぐる思想とを重ね合わせ、新自由主義的な経済システムや未来優位の時間の観念、生産主義的で自立的な主体観に縛られた私たちの生のあり方を相対化し、ひとつではない多様な生のあり方を構想する。

市民社会は共生のモデルとなりうるか？——P・デュムシエル

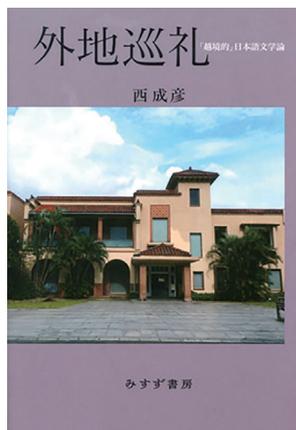
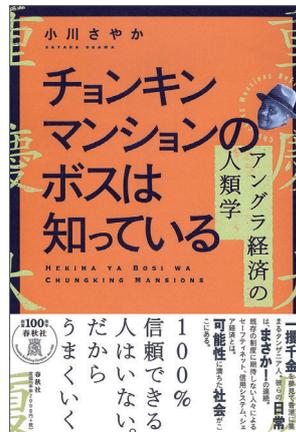
政治哲学を基礎に市民社会の起源と構造を論じたさまざまな社会、政治哲学の再検討をおこなう。西洋のそれぞれの国民的伝統のなかで市民社会が形成され、また、この社会の原理を根拠づけるさまざまな哲学の流れが生み出されてきた。市民社会においては、欲望を実現する主体としての市民を前提として、市民が契約し、経済システムを構成し、社会を民主的に運営するとされるが、欲望はどのように構成されるのか、欲望と経済システムの関係はいかなるものか、そうした基本的な視点から、そこに含まれた「普遍的」とされる原理の可能性と限界を問い直す。

カタストロフィと文学——西成彦

人類の歴史ははずかすの「災厄」に彩られてきた。自然災害であれ、戦争や人災であれ、災害はけっして一様にひとに襲いかかってくるわけではない。しかも、加害者側に立って責任を引き受けなければならないことが往々にしてある。そうしたなかで、「カタストロフ」の危険にさらされてきたひとびと、および、そこに加害者・傍観者として関わってしまったひとびとの経験と記憶は、その一部が「記録」に残されるが、それでも足りない部分は「文学的な想像力」にゆだねるしかない。文学の可能性と限界を考える。

テクノロジーと人間のあいだで何が生じるのか——山本貴光

テクノロジーは人類の歴史とともに古く、人類の歴史とともに新しい。交通や通信、エネルギーの生産・利用を典型として、古来人間の生活や思考は、テクノロジーとともに変化してきた。その最新の事例である人工知能（AI）は、いまや人びとにとって一種の環境となりつつある。欲望に働きかけるレコメンドや個人を判別・追跡する顔認識はその一例だ。多様なテクノロジーによって、できること／できないことの境界が絶えず変動する世界で、私たちの生や経験の条件はどのような状況にあるだろうか。来たるべきウェルビーイングを構想するための基礎として、テクノロジーと人間のあいだで生じつつあることを探究しよう。





竹中悠美
芸術学



千葉雅也
哲学・表象文化論



M・ロート
メディア・日本地域研究

表象

文化と芸術の表象論的分析

文化と芸術の諸事象を表象論的観点から読解・分析します。技術、歴史、思想、実践への理解を主軸とし、創造と受容の場、諸々の文脈、メディアといった問題系へとアプローチします。

社会におけるアートの作用機序——竹中悠美

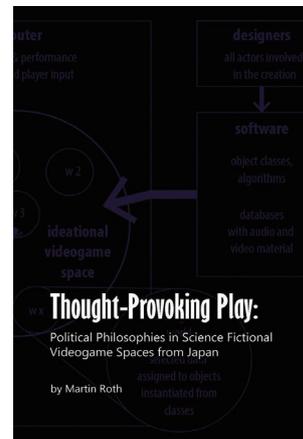
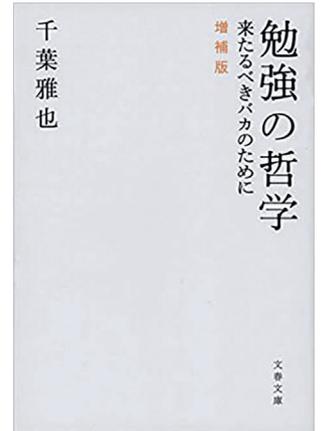
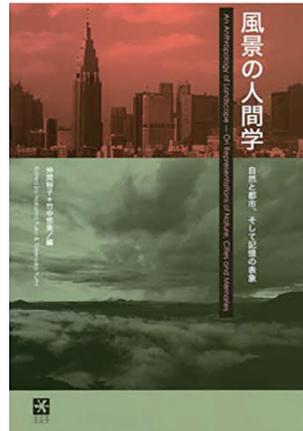
芸術学を基礎に置き、社会の中でアートに託された機能とそれを実践するための制度的・技術的システムを検討する。アートがパブリックな文化財として「消費」される現代の資本主義社会において、われわれとアートを取りもつたるシステムは美術館やアートセンターという場所と情報メディアである。そこで、展覧会、アートプロジェクト、文化政策が企図する文化活動の方法と課題、およびメディアにおけるその扱いを検証することによって、アートの意義を問い直す。

現代哲学と批評のあいだで思考する——千葉雅也

表象文化の多様なケースを併せて考察するために、現代哲学を媒介として芸術・文化・社会・欲望の諸理論を交流させ、そして、領域横断的な論述の方法、および批評的なスタイルの修辞学を検討する。人間＝私たちを特権化しない「ものごと」の存在論・形而上学と連動して展開される表象論を目指し、これを、現代のテクノロジー状況——それは人間性をめぐる常識・良識を変容させざるをえないだろう——に応じた「人文学への批評」の一環として提示していく。

ゲーム・デジタルメディアを探検する——M・ロート

遊びとデジタル技術が組み合わされることにより生まれる表現空間・インタラクション空間の可能性と限界を検討する。日本のゲームを中心に、その空間においてどのような想像力・文化が発生し、あるいは現代社会の諸問題がどのように表出し、議論され、解決方法が探られているかを批判的に分析する。そのためには各空間に触れると同時に、これらの空間の社会的・経済的・技術的・制度的な背景を理解する必要がある。表象文化のみならず、現代社会は、デジタル技術により大きく変化しつつある。ゲーム・プラットフォーム・デジタルメディア空間はその変化を考えるための一つの鍵となるはずだ。



充実した研究支援体制

ライティング指導室（創思館 307）には、研究指導助手と英語論文指導スタッフが常駐しており、以下の業務を行っています。

- ・日本語論文の書き方および添削指導（研究指導助手・日本語論文指導スタッフ）。
- ・英語論文の書き方および添削指導（英語論文指導スタッフ）。
- ・先端総合学術研究科主催のシンポジウム・研究会の企画・運営に関わる業務。
- ・『Core Ethics』（研究科紀要）の編集、研究科彙報の編集、研究科 Web サイトの管理、院生プロジェクトの運営の支援など。
- ・日本学術振興会特別研究員等申請書作成のサポート。

また本研究科の博士論文の閲覧受付、図書・備品の貸し出し、『Core Ethics』・彙報の配布等も同室にて実施しています。

院生のための奨学金・研究活動助成制度 （大学全体の制度は大学 HP<大学院キャリアパス推進室>を参照のこと）

●先端総合学術研究科 院生プロジェクト

先端総合学術研究科では、院生の運営する研究プロジェクトに対して必要な研究資金の一部を交付し、外部資金を獲得して研究成果を出すトレーニングの場を設けています。

- ①共同研究を通じて、博士論文執筆に必要な研究力を向上させる。
- ②最先端の国際的な研究動向を理解し、海外の院生と協働・討論する能力を培う。
- ③各個研究を一つのテーマのもとで編集し、独創的な共同研究を組織できる研究者となる。

研究者としてのキャリアパス支援

博士学位取得後のキャリアパスとして、各種ポストドクトラルフェローの制度があります。日本学術振興会特別研究員や立命館大学笠籠総合研究機構の専門研究員プログラムなどに多くの院生・修了生が採用されています。

- ①日本学術振興会特別研究員採用者数（DC1、DC2 合計数）
 - 2016年度 1名
 - 2017年度 2名
 - 2018年度 4名
 - 2019年度 2名
 - 2020年度 3名
 - ※2020年度のDC1の採用率は50%であり、全国平均の20%を大きく上回っている
- ②笠籠総合研究機構専門研究員新規採択者数（修了生）
 - 2016年度 3名
 - 2017年度 1名
 - 2018年度 0名
 - 2019年度 2名
 - 2020年度 0名
- ③大学院高度化施策初任研究員採択者数（修了生）
 - 2019年度 1名
 - 2020年度 2名

主な就職先 （アカデミックポスト以外も含む）

稲盛財団、岩手大学、大阪樟蔭女子大学、大阪市立大学、大阪大学、大阪府立大学、金沢大学、韓国・LH 土地住宅研究院、関西大学、岐阜医療科学大学、九州保健福祉大学、京都大学、京都文教大学、群馬パース大学、皇學館大学、韓国・光州大学、台湾・康寧大学、神戸国際大学、神戸松蔭女子学院大学、国立民族学博物館、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、島根県立美術館、尚綱大学、聖泉大学、聖隷クリストファー大学、台湾・高雄文藻外国語学院、千葉商科大学、中部大学、東京都教育庁、東京福祉大学、東京薬科大学、長野大学、名古屋市立大学、名寄市立大学、南山大学、日本学術振興会、日本大学、日本福祉大学、羽衣国際大学、花園大学、広島修道大学、福岡教育大学、佛教大学、台湾・文藻外国語大学、三重県立看護大学、立命館大学、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、和光大学、早稲田大学、等
(50音順)

博士論文などをもとにした書籍の刊行

受賞作・2019年以降に刊行された書籍の一部

- 川口有美子（2012年度修了）第41回大宅壮一ノンフィクション賞、
『逝かない身体:ALS的日常生活を生きる』（2009年、医学書院）
- 川端美季（2011年度修了）第2回法政大学出版局学術図書刊行助成、
『近代日本の公衆浴場運動』（2016年、法政大学出版局）
- 山本由美子（2012年度修了）第1回生存学奨励賞審査員特別賞、
『死産児になる：フランスから読み解く「死にゆく胎児」と生命倫理』（2015年、生活書院）
- 由井秀樹（2013年度修了）2015年度 日本科学史学会学術奨励賞、
『人工授精の近代：戦後の「家族」と医療・技術』（2015年、青弓社）
- 矢野亮（2014年度修了）第2回生存学奨励賞、
『しかし、誰が、どのように、分配してきたのか：同和政策・地域有力者・都市大阪』（2016年、洛北出版）
- 萩原由加里（2009年度修了）日本アニメーション学会奨励賞 2016、第13回木村重信民族芸術学会賞、
『政岡憲三とその時代：「日本アニメーションの父」の戦前と戦後』（2015年、青弓社）
- 小西真理子（2013年度修了）第4回生存学奨励賞、
『共依存の倫理：必要とされることを渴望する人びと』（2017年、晃洋書房）





立命館大学衣笠独立研究科事務室

TEL: 075-465-8348 FAX: 075-465-8364

E-Mail: doku-ken@st.ritsumeai.ac.jp

先端総合学術研究科に
ついての詳細は

立命館 先端

